

巻頭言

山梨大学医学部第二外科

松原 寛知

我が家には『もも』というビーグル犬がいます。現在年齢は13歳で人間に例えると70歳ぐらいになります。昨年11月12日まさに、この山梨肺癌研究会の週のことでした。急性胆嚢破裂になりました。ビーグル犬は歳をとると甲状腺機能が低下してコレステロール値が上がり、それが原因で胆嚢内にコレステロールの粘液が固まる胆嚢粘液腫になることが多いそうです。それ自体は症状がないのですが、粘液腫が大きくなりすぎてとうとう胆嚢を破ってしまうと、いわゆる急性腹膜炎になります。『もも』は、その急性腹膜炎になってしまいました。年齢から考えてこのまま看取するという選択肢もあると説明されましたが、緊急手術をお願いすることにしました。獣医さんからは、病態としては五分五分ですが、全力を尽くしますと言われました。夜9時過ぎに手術が始まりました。手術が終わるまでの間は、自分ではどうすることもできず、ただ祈るばかりでひたすら待つことしかできませんでした。この時、手術を受ける患者さんやその家族の気持ちを改めて考えさせられました。この手術が成功しなければ、『もも』は死ぬことになるし、成功すれば元気になる。それを数時間の間ただ待つことしかできないのです。我々が普段当たり前に行っている医療（私の場合は手術ですが・・・）が、患者さんからすると一世一代の人生の勝負の場合になっているのです。受ける患者さんも相当な覚悟で臨むだろうし、手術の間待っている家族も不安や恐怖で一杯だろうと思います。今までも、患者さんの気持ちというものを頭では理解してきたつもりでしたが、実際にそれを自分で経験してみて改めてわかりました。それは、想像以上の勝負なのです。

『もも』は、勝負に勝ちました、今日も元気にご飯を食べて、散歩にも一緒に行くことができます。

今回、改めて手術を受ける人々の覚悟というものを、愛犬の手術から経験することができました。

我々外科医は、この覚悟を背負い、全力で手術に臨み、必ず成功させなければいけないのである。